

裴迪生年考

陣内, 孝文
九州大学大学院人文科学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9599>

出版情報：中国文学論集. 33, pp.61-75, 2004-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

裴迪生年考

陣内孝文

裴迪は王維の「輞川集二十首」(『王右丞集箋注』^① 卷十三)に唱和した詩人であり、また天宝十五載(七五六)、王維が安祿山の乱に巻き込まれて賊軍に囚われた時も側を離れず、王維の口号詩を伝えた人物である。裴迪の詩は二十八首現存するが、全て王維との唱和、贈答詩であり、『王右丞文集』に収められたこと^②によって残り、王維の詩集が無ければ彼の詩も残らなかつたと言える。そのような彼について、入谷仙介氏は「王維にとつて、ほんとうに心の扉を開いて明けっぴろげにできる友、肌と肌をすりよせて温もりを取りあうようなしみじみした交わりを持つことのできる友」^④であつたと述べている。

しかし、このように王維との結びつきが極めて強い裴迪が、王維にとつてどんな存在であつたかを探ることが王維研究を進める上での重要なポイントでありながら、裴迪の生涯については不明な点が多く、事跡の詳細については判然としない。本稿は、その裴迪の生年と事跡を筆者なりに可能な限り検証し、王維と裴迪の関係を考察しようとするものである。

一

裴迪は『旧唐書』、『新唐書』ともに伝は無く、詳細を記述した資料に乏しい。『唐詩紀事』や『唐詩品彙』^⑤など、断片的な事柄しか伝えていないため、残る手がかりは裴迪と交流のあつた王維や孟浩然などの詩人たちの唱和

詩や贈答詩のみとなる。今、先行研究によって明らかにされている事跡を整理すると、次のようである。

『新唐書』卷七十一上、「宰相世系表」は中宗時代の宰相であった裴談、裴炎と同族である洗馬裴氏、任城県尉裴回の長子とする。

孟浩然「從張丞相遊南紀城獵戲贈裴迪張參軍」詩（『全唐詩』卷一五九）がある。南紀城は江陵付近の紀南城、張丞相は張九齡で、開元二十五（二七八）年（七三七）七四〇に張九齡が荊州に左遷されていた時期の詩であり、詩中の「世祿金張貴（世々金張の貴を祿す）」は裴迪を指す。

上元初年（七六〇）頃、杜甫が成都に在った時の作に、「和裴迪登新津寺寄王侍郎」詩、「和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄」詩、「暮登四安寺鐘樓寄裴十迪」詩（『杜詩詳註』卷九）がある。第一首の王侍郎は王維の弟の王縉を指し、裴迪は蜀州刺史となつた王縉とともに蜀州へ行った。

李頎「聖善閣送裴迪入京」詩（『全唐詩』卷一三四）の詩中に「舊託含香署 雲霄何足難（旧と含香の署に託す 雲霄 何ぞ難しとするに足らん）」とあり、「含香の署」は裴迪が尚書郎となつたことを言うが、他の資料には尚書郎となつたことは見えない。

錢起「裴迪南門秋夜對月」詩（『錢考功集』卷四）がある。

この他、諸氏の考証に基づいて右の事跡に補足すると、
聞一多は、裴迪の生年を開元四年（七一六）とする。

天宝三、四載（七四四、七四五）頃に、王維、王昌齡らとともに長安の青龍寺を訪れて詩を唱和している。

天寶中に王維、盧象らとともに崔興宗の林亭を訪問して詩を唱和している。

天寶八、十二載（七四九、七五三）頃、李頎「聖善閣送裴迪入京」詩が詠じられている。

錢起「送裴頎侍御使蜀」詩（『錢集』卷八）から、上元初め侍御史として蜀に赴き、蜀州刺史王縉の幕下に在ったことが判る。

以上のように、先行研究には裴迪の事跡について言及があり、その生涯が或る程度明らかになる。しかし、筆者の見るところ、これらの中にはなお再検討を要する問題が幾つか残されているように思われる。以下、その点につ

いて論じていきたい。

二

まず、事跡資料 に従って裴迪の生年を開元四年とすると、王維「故任城縣尉裴府君墓誌銘」(『箋注』卷二十六)の次の表現と大きな齟齬が生じる。

天寶二年正月十二日、唐故魯郡任城縣尉、河東裴府君、卒于西京新昌坊私第。享年三十九。嗚呼哀哉。君諱回、字玉溫。河東聞喜人也。曾祖弘泰、皇雍州錄事參軍、贈上黨長史。祖思義、皇侍御史、吏部員外、左司郎中、戸部吏部侍郎、河東郡太守、晉城縣開國子。父敷珍、皇薛王府騎曹參軍。……慈母在堂、諸弟未仕、兒未有識、女且嬰孩。妻天于前、身没于後。天可問邪。其若老親何。其若季仲諸孤何。生人之悲、莫甚于是。

(天寶二年正月十二日、唐の故魯郡任城縣尉、河東の裴府君、西京新昌坊の私第に卒す。享年三十九。嗚呼哀しき哉。君 諱は回、字は玉溫、河東聞喜の人なり。曾祖弘泰は、皇雍州錄事參軍たり、上党長史を贈らる。祖思義は、皇侍御史、吏部員外、左司郎中、戸部吏部侍郎、河東郡太守、晋城県開國子たり。父敷珍は、皇薛王府騎曹參軍たり。……慈母は堂に在り、諸弟は未だ仕へず、兒は未だ識有らず、女は且つ嬰孩なり。妻は前に天し、身は後に没す。天 問ふべけんや。其れ老親を若何せん。其れ季仲諸孤を若何せん。生人の悲しみ、是より甚だしきは莫し。)

冒頭の記述から、天寶二載(七四三)正月十二日に裴府君(回)という人物が三十九歳で亡くなったことが判る(生年は神龍元年 七〇五 とする)。この裴回は事跡資料 に挙げるように、裴迪の父と考えられるが、裴迪が開元四年生まれならば天寶二載に二十八歳となり、父子の年齢差が十一歳となるのでその関係が合わない。墓誌銘の記述には「兒は未だ識有らず。」とあり、これによれば裴回の子、すなわち裴迪たちはまだ幼かったと考えられ、生年は開元四年よりかなり下ることになる。しかし、天寶二載にまだ幼かったはずの裴迪が開元二十五(二十八年)に孟浩然、張九齡と交流があったことと矛盾する。これについて、楊文雄の説は次の点から、裴迪の生年を開元九、

十年(七二二、七二二)頃としており、孟浩然との交友も可能となっている。

事跡資料の錢起「送裴頤侍御使蜀」詩の起句に「柱史 纔かに年四十強」とあり、裴迪は上元元年(七六〇)に四十歳ほどであった。

すると、孟浩然、張九齡と交流があつた時期には二十歳頃となり、交遊が可能となる。

「有識」には「有卓見(優れた見識をもつ)」「意があるので、「児は未だ識有らず」は「兒子尚未成名(子供はまだ世に認められる人物となっていない)」「意と解することができる。」

これは裴迪の生年についての新しい見解ではあるものの、以下の三つの点より否定せざるを得ない。

事跡資料に挙げる杜甫の詩はほぼ同時期の作である筈だが、裴迪を「侍御」と称しておらず、錢起の詩が上元元年の作か判然としない。

潘岳「寡婦賦」(『文選』卷十六)に墓誌銘と同種の表現がある。(傍点筆者)

仰皇宮兮歎息、私自憐兮何極。省微身兮孤弱、顧稚子兮未識。(皇宮を仰いで歎息し、私かに自ら憐んで何ぞ極まらん。微身の孤弱なるを省み、稚子の未だ識あらざるを顧みる。)

しかも、墓誌銘の「児は未だ識有らず」は「女は且つ嬰孩なり」と対句であり、共に幼年であることを指すと考えられる。

よつて裴迪は、天寶二載にはまだ物事を理解するに及ばない幼い子供であつた、と解するのが妥当である。^⑬

三

ところで、以上のように考えると、更に孟浩然、張九齡との交流や天寶三、四載頃に王昌齡らと詩を唱和している事実と矛盾してしまふ。

事跡資料に挙げる孟浩然「從張丞相遊南紀城獵戲贈裴迪張參軍」詩であるが、裴迪が天寶一載に四歳前後であつたならばその生年は開元二十八年頃となり、孟浩然と裴迪の交遊は無理である。ここで注目したいのは、詩題の

「迪」の字である。この字は宋代の版本では「適」に作り、宋本を底本とする修培基『孟浩然詩集箋注』は、「適」を「迪」に変えず、裴迥という人物であることを注記している。²⁰ところが、明・清代の版本、また現代に出版された注釈書のうち、管見に入った諸本は「適」を全て「迪」あるいは「迪」に恣意的に改めてしまっている。²¹該詩は、従来裴迪と孟浩然の交流があったことを示す根拠となっていたが、全く別人であった可能性が出てきた。

事跡資料 に挙げる李頎「聖善閣送裴迪入京」詩について、裴迪の尚書郎任官の有無が問題となる。『唐尚書郎官石柱題名考』²²にも裴迪は尚書郎に名を連ねていない。この詩が詠まれたとされる天宝八〜十二載頃、裴迪は十四歳であったと考えられるので、尚書郎になつていたとは考え難い。この李頎の詩題の裴迪も、王維の友である裴迪とは全く別人である可能性が高い。

事跡資料 の盧象らとの唱和時期については二説あり、傅璇琮は天宝三載（七四四）とし、陳鉄民は天宝八、九載（七四九、七五〇）頃とする。²³両説は劉禹錫「唐故尚書主客員外郎盧公集紀」（『劉賓客文集』卷十九）に、

擢爲左補闕、河南府司録、司勳員外郎。名盛氣高、少所卑下、爲飛語所中、左遷齊、汾、鄭三郡司馬。入爲膳部員外郎。（擢んでられて左補闕、河南府司録、司勳員外郎と爲る。名盛んにして気高く、卑下する所を少き、

飛語の中あたの所と爲り、齊、汾、鄭三郡の司馬に左遷せらる。入りて膳部員外郎と爲る。）

とあるのに基づき、傅璇琮の説では盧象は天宝三載に司勳員外郎となり、天宝四載（七四五）に齊州に左遷されていたとする。陳鉄民は王維「與盧員外象過崔處士興宗林亭」詩（『箋注』卷十四）に「崔處士興宗」とあるので、天宝十一〜十三載（七五二〜七五四）に崔興宗が右補闕になる前とし、「盧員外象」は盧象が膳部員外郎であったことを指すと推測する。裴迪の年齢から推しても天宝三載説には同意し難く、劉禹錫の文によれば盧象は齊州などの司馬となつた後、天宝八、九載頃、長安に戻り膳部員外郎に任ぜられたとした方が順当であり、その頃に唱和したとする陳鉄民の説が妥当である。²⁴

四

これまで裴迪の生年を問題としてきたが、以上の推論が妥当と認められるならば、王維と裴迪は四十歳ほどの年齢差となる。それほど年の離れた二人はどのような関係を築いていたのだろうか。しかも年齢差を考慮すれば、本稿冒頭で挙げた入谷説とは別の捉え方ができそうである。まず、「輞川集」の唱和時期を考えてみたい。

天宝十一載（七五二）、王維は母の喪が明けて吏部郎中として官界復帰後、天宝十五載（七五六）に賊軍の捕虜となるまでの間、順調に官位を重ね安定した生活を送っていた。ちょうど裴迪は十五、六歳頃の青年期に当たり、「輞川集」の唱和がなされたのもこの頃であったと考えられる。入谷説では、「輞川集」は王維と裴迪二人で創り出した芸術作品とするが、裴迪の年齢を考慮すると、王維にとつては芸術作品であつたとしても、裴迪にとつて果たしてそのような見方は当てはまるであろうか。「輞川集」全体は王維の詩によつて芸術性の高みにあるとしても、王維と裴迪の詩を比較してみると、裴迪の詩は芸術作品の一翼を担うには荷が重いと考えられる。

「輞川集」其五「鹿柴」詩、王維は、

空山不見人 但聞人語響 空山 人を見ず 但だ人語の響くを聞くのみ

返景入深林 復照青苔上 返景 深林に入り 復た青苔を照らして上る

と、人の話し声が響いてくることを詠むことで、人氣の無い山の静寂さを際立たせ、青苔を照らす夕日の光が移っていく描写で時間の推移までも表現しているが、対して裴迪の詩は次の通りである。

日夕見寒山 便爲獨往客 日夕 寒山を見 便ち独往の客と爲る

不知松林事 但有聲屢跡 知らず 松林の事 但だ聲屢の跡有るのみ

二句目に「獨往」の語を用いて自由闊達の境地を詠じ、王維詩に追隨しようとするが、後半二句は鹿柴の一時点の情景描写に終始している感があり、王維詩のようなのびやかさに欠けるように思われる。

また、其十八、王維「辛夷塢」詩を見てみると、

木末芙蓉花 山中發紅萼 木末 芙蓉の花 山中 紅萼ひび発く

澗戸寂無人 紛紛開且落 澗戸 寂として人無く 紛紛として開き且つ落つ

起句に『楚辞』九歌、湘君の「採薜荔兮水中 擧芙蓉兮木末（薜荔を水中に採り 芙蓉を木末に擧る）」に基づき、梢に咲く紅い辛夷（コブシ）の花をハスの花に喩えて幻想的な雰囲気詠み、後半二句にはひらひらと散る花びらの表現でより人氣の無い閑寂さを強調する。これに対し裴迪の詩は次の通りである。

綠堤春草合 王孫自留馱 綠堤 春草合し 王孫 自ら留まり玩ぶ

況んや辛夷花 色與芙蓉亂 況んや辛夷の花の 色は芙蓉と乱るる有るをや

王維詩の用字を受けて、『楚辞』招隱士の「王孫遊兮不歸 春草生兮萋萋（王孫遊びて帰らず 春草生じて萋萋たり）」を用い、結句には王維詩の「芙蓉」の語を襲用している。裴迪詩は王維詩の発想に準拠して詠まれることが多く、叙景描写を主眼とし王維詩の跡をなぞるような詩表現が多い。次の其四「斤竹嶺」詩の両者の前半二句を見ると、王維は、

檀欒映空曲 青翠漾漣漪 檀欒 空曲に映じ 青翠 漣漪たなびに漾ふ

と詠じ、裴迪は、

明流紆且直 綠篠密復深 明流 紆にして且つ直く 綠篠 密にして復た深し

と詠じている。このように、王維詩がざざ波に映る竹の緑を表現する繊細な感覚まで詠じるのに対して、裴迪詩は王維詩の一句目の表現を二句費やして敷衍するように描写している。やはり裴迪には、王維に比肩するほどの詩才はまだ無かったようである。

しかし、『輞川集』を唱和した頃、拙稿の推論によれば、裴迪は十五、六歳ほどの若者で、王維は五十代後半、宮廷詩人としても大家であったことを考え合わせると、裴迪がその王維の詩を忠実に真似、学ぼうとする姿勢は、裴迪にとつて「輞川集」の唱和は、初々しい青年の意欲作であった、とする見解も可能ではないだろうか。

翻つて、この裴迪の活動は、王維の目にはどのように映っていたのであろうか。思うに、この十代の青年は、まさしく王維その人の過去の姿にも重ね合わせることができそうである。王維の十五、六歳頃の文学創作の場は、長

安の王侯貴族が集う場であった。『旧唐書』卷一九〇、本伝に、

維以詩名盛於開元、天寶間。昆仲宦遊兩都。凡諸王駙馬、豪右貴勢之門、無不拂席迎之。寧王、薛王待之如師友。(維は詩名を以て開元、天寶の間に盛んなり。昆仲は兩都に宦遊す。凡そ諸王駙馬、豪右貴勢の門、席を払ひて之を迎へざるは無し。寧王、薛王 之を待すること師友の如し。)

とあり、王維が諸王や貴族と交流があつたことが判る。入谷説に従えば、王維は開元五年(七一七)に十九歳で京兆府試に解頭で合格し、開元七年(七一九)には二十一歳で進士に及第している^①。そして、王維には制作年代を自注で記した詩が残っている。

- | | | |
|--------------|---------------------|-----------|
| 「過秦皇墓」詩 | 「時年十五」 ^② | (「箋注」卷九) |
| 「題友人雲母障子」詩 | 「時年十五」 | (「箋注」卷十三) |
| 「九月九日憶山東兄弟」詩 | 「時年十七」 | (「箋注」卷十四) |
| 「洛陽女兒行」 | 「時年十八」 ^③ | (「箋注」卷六) |
| 「哭祖六自虛」詩 | 「時年十八」 | (「箋注」卷十二) |
| 「李陵詠」 | 「時年十九」 | (「箋注」卷五) |
| 「桃源行」 | 「時年十九」 | (「箋注」卷六) |
| 「賦得清如玉壺冰」詩 | 「京兆府試、時年十九」 | (「箋注」卷十二) |
| 「息夫人」詩 | 「時年二十」 | (「箋注」卷十三) |
| 「燕支行」 | 「時年二十一」 | (「箋注」卷六) |

このことから、王維は自注に付された十五、二十一歳頃、頻繁に貴顕の集う場で詩を詠じていたことが窺える。さらに、王維は皇族の岐王(李範)とも交流があつた。王維の詩集には、

- | | |
|----------------|----------|
| 「從岐王過楊氏別業應教」詩 | (「箋注」卷七) |
| 「從岐王夜讌衛家山池應教」詩 | (「箋注」卷七) |
| 「敕借岐王九成宮避暑應教」詩 | (「箋注」卷十) |

の三首が残っている。具体的な年代は判然としないが、これも進士及第前後の頃と推測される。⁽³⁴⁾『旧唐書』本伝に見える寧王(李憲)は『旧唐書』卷九十五、讓皇帝憲伝によれば、開元五(八年)には三十九(四十一)歳であり、岐王は三十歳半ば、薛王(李業)も三十歳前半と考えられる。王維の年齢とそれぞれ二十歳差、十歳差ほどとなり、『旧唐書』王維伝に記すように、「師友の如」き関係となる。

王維が年長者の諸王を前にし、貴顕の人々が集う場で詩を詠じていた環境は、後に彼が嘗む輞川荘で形成された、王維とそこに集った詩人たちの交流の場に類似している。一例を挙げると、王維の「青雀歌」(『箋注』卷六)に盧象らが唱和した作品がある。王維の詩には、

青雀翹羽短

青雀 翹羽短く

未能遠食玉山禾

未だ遠く玉山の禾を食らふ能はざるも

猶勝黃雀爭上下

猶ほ黃雀の上下を争ふに勝る

啣啣空倉復若何

空倉に啣啣たるは復た若何

伝説の青い鳥ならぬ、青雀に自分たちをなぞらえ、青鳥のように西王母の住む玉山まで飛んで稲を食べることはできないが、雀のように鳴き騒いで身分の上下を争う人々には勝るだろう。空の倉で鳴く雀のような彼らはどんなものだろうか、と問いかけるように詠じる。それに対し、盧象や王縉、崔興宗らはそれぞれの感懐や志を詠じて答えている。盧象の詩には、

啾啾青雀兒

啾啾たる青雀兒

飛來飛去仰天池

飛來飛去して 天池を仰ぐ

逍遙飲啄安涯分

逍遙して飲啄するは 涯分に安んず

何假扶搖九萬爲

何ぞ扶搖の九万を仮るを為さん

と、三、四句目に自分の処世について自由に分相應の暮らしをすることを言い、「莊子」内篇、逍遙遊篇に見える大鵬になぞらえて、分不相応なことをしようとは思わないと答えている。続く王縉の詩には、

林間青雀兒

林間の青雀兒

來往翩翩繞一枝 來往し翩翩として 一枝を繞る

莫言不解銜環報 言ふ莫かれ 環を銜みて報ゆるを解せずと

但問君恩今若焉 但だ問ふ 君恩 今若為

と、黄雀が命を助けてもらいその恩に報いた故事に基づいて、黄雀でさえ恩に報いたのに青雀である自分が恩に報いないことはない、今はまだ報いるほどの恩を受けておらず、そのような地位にもついていないのだと答える。そして、崔興宗の詩は、

青扈繞青林 青扈 青林を繞る

翩翩陋體一微禽 翩翩たる陋體の一微禽

不應長在藩籬下 応に長く藩籬の下に在るべからず

他日凌雲誰見心 他日 雲を凌がんで誰か心を見ん

三、四句目に、いつまでも垣根の下でくすぶっているつもりはなく、いつか雲をしのぐほど高く飛びたい、誰がこの心を知っていようか、とその志の高さを詠じる。最後に裴迪の詩は、四人の詩をまとめるように詠じている。

動息自適性 動息 自ら性に適ふ

不曾妄與燕雀羣 曾て妄りに燕雀と群せず

幸忝鴛鴦早相識 幸ひに鴛鴦と早に相識るを忝くす

何時提携致青雲 何れの時にか提携して青雲を致さん

一句目は、盧象詩の「逍遙して飲啄するは涯分に安んず 何ぞ扶搖の九万を仮るを為さん」を受け、「一、三句目は王維詩の三句目「猶ほ黄雀の上下を争ふに勝る」を受けている。四句目は王維詩の「但だ問ふ 君恩 今若為」、

崔興宗詩の「他日 雲を凌がんで誰か心を見ん」という高い志に同調する。このように、彼らの交流の場では王維を中心に互いの感懐を詠い合い、詩作を競っていた事情が垣間見える。

これまで、裴迪の生年と事跡を再検討し、王維の文学活動との関係を論じてきた。従来、裴迪は開元四年に生ま

れ、王維との年齢差は十五歳前後とされ、開元末年頃に孟浩然と交流し、後に尚書郎或いは侍御史に任官したかとの見解が示されてきた。そして、王維と裴迪の関係は入谷説に代表される如く、忘年の交わりを結んだ心の友として捉えられてきた。しかし、拙稿の推察が妥当と認められるならば、裴迪の生年は開元二十八年頃、王維との年齢差は四十歳前後となり、更に孟浩然との交遊や尚書郎などに任官したと思しき事実は、全く別人の事跡である可能性が高いことが明らかになったと思われる。加えて裴迪の年齢が従来の説よりもずっと若かったという事実は、王維と裴迪の関係を捉える上で重要な手がかりを示すものといえよう。それは、王維が若い頃に諸王や貴顕の宴集の場に参列して詩を詠じていた状況と、輞川荘に集った裴迪や盧象、王縉、崔興宗らと詩を唱和する状況とは類似しており、このことは、翻つて考えれば、若い頃に諸王や貴顕を前にして詩才を競っていた場が文学の出発点であった王維にとつて、後の輞川荘での文学活動がその再現であったことを示唆するとも考えられ、王維は目前で詩を詠じる若者、裴迪の姿に若き日の自分を投影していたのではないだろうか、と推察できるからである。この見解が許されるならば、王維が「輞川集」における唱和の相手として、まだ詩人として駆け出しであった青年裴迪を敢えて選んだ理由が自ずと露わになってくるように思われるのである。

注

- (1) 本稿は趙殿成『王右丞集箋注』（上海古籍出版社、一九八四年排印）を底本とし、適宜諸本を参看した。以下、『箋注』と略称する。
- (2) 王維「菩提寺禁、裴迪來相看説、逆賊等、凝碧池上作音樂、供奉人等、舉聲使一時淚下。私成口號、誦示裴迪」詩（『箋注』卷十四）。
- (3) 静嘉堂文庫所藏宋麻沙本『王右丞文集』（雄松堂書店、一九七七年影印）には、「輞川集二十首」の他に、王維の次の詩に裴迪の詩が付されている。

1 王維「青雀歌」

裴迪「同前」（卷一）

裴迪生年考

- 2 王維「答裴迪」
裴迪「輞口遇雨憶終南山因獻絕句」(卷二)
- 3 王維「與盧員外象過崔處士興宗林亭」
裴迪「同前」(卷四)
- 4 王維「青龍寺曇壁上人兄院集并序」
裴迪「同前」(卷四)
- 5 王維「過感化寺曇興上人山院」
裴迪「同前」(卷四)
- 6 王維「夏日過青龍寺謁操禪師」
裴迪「同前」(卷四)
- 7 王維「春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇」
裴迪「同前」(卷四)
- 8 王維「崔九弟欲往南山馬上口號與別」
裴迪「同前」(卷五)
- また、『全唐詩』卷二二九に裴迪「西塔寺陸羽茶泉」詩があるが、『唐音統籤』卷八二七に「此の詩、楊升庵(慎)以つて之を石刻に見ると為す、然るに羽は自ら大曆の後に在れば、則ち迪が詩に非ざるは明かなり。」とあるように、後世の偽作の可能性が高く、本稿では裴迪の作品に含めないこととする。
- (4) 入谷仙介『王維研究』(創文社、一九七六年)「第十章 周邊の人人」四六六頁。
- (5) 明・高棅『唐詩品彙』、王維「贈裴迪」詩注(『箋注』卷二)、王仲鏞『唐詩紀事校箋』(巴蜀書社、一九八九年)を参照した。
- (6) 入谷仙介『王維研究』「第十章 周邊の人人」四五五―四五六頁参照。
- (7) 孟浩然の詩は明刊本『孟浩然集』(『四部叢刊』初編所収)によるべきだが、この詩には後述するように問題があるため、ここでは『全唐詩』本によった。
- (8) 杜甫の詩は清・仇兆鰲『杜詩詳註』(中華書局、一九七九年排印)を底本とし、適宜諸本を参看した。以下、『詳註』と略称。王縉が蜀州刺史であったことは、小林太市郎『王維の生涯と藝術』(『小林太市郎著作集』第四卷、淡交社、一九七四年)九〇―九二頁参照。
- (9) 『四部叢刊』初編所収。以下、『錢集』と略称。なお、唐・高仲武『中興間氣集』卷一は題名を「裴迪書齋翫月」詩とする。創作時期は不詳であるが、裴迪の邸宅か山居で詠まれたのであろう。
- (10) 聞一多『唐詩大系』(『聞一多全集』第四卷、大安、一九六七年)参照。

- (11) 王維「青龍寺曇壁上人兄院集并序」詩（『箋注』卷十二）及び王昌齡、王績、裴迪らの唱和詩。時期については傅璇琮「王昌齡事跡考略」（『唐代詩人叢考』中華書局、二〇〇三年）一三四―一三六頁参照。
- (12) 王維「青雀歌」（『箋注』卷六）、王維「與盧員外象過崔處士興宗林亭」詩（『箋注』卷十四）及び盧象、王績、崔興宗、裴迪らの唱和詩。その時期については後述する。
- (13) 傅璇琮「李頤考」（『唐代詩人叢考』所収）一〇五頁参照。
- (14) 楊文雄「詩仏王維研究」（文史哲出版社、一九八八年）五一―五二頁、傅璇琮主編『唐五代文學編年史』（遼海出版社、一九九八年）中唐卷、上元元年条参照。なお、「頤」字は、岑仲勉『唐人行第録』（中華書局、一九六二年）に、「迪」或作「頤」とある。
- (15) 『箋注』は清・乾隆帝の諱、弘曆を避けて「宏」に作る。静嘉堂文庫本巻十が「弘」とするのに従う。
- (16) 墓誌銘の曾祖父弘泰らの名前と官職名は「宰相世系表」の記載と一致する。しかし、「宰相世系表」の裴迪と王維の友人の裴迪とが真に同一人物か、という点ではなお疑問は残る。今後、更に調査を続けたい。
- (17) 詩の全文は以下の通り。「柱史纔年四十強、鬚髯玄髮美清陽。朝天繡服乘恩貴、出使星輶滿路光。錦水繁華添麗藻、峨眉明月引飛觴。多才自有雲霄望、計日應追駕鷲行。」なお、傅璇琮『唐五代文學編年史』中唐卷、上元元年条も同様の見解を示している。
- (18) 原文は以下の通り。「看來「兒未有識」有多重解釋、此「兒」當係指裴迪兄弟四人（據宰相世系表）、「有識」依辭海解爲「有卓見」、此句似可解爲「兒子尚未成名」、但依常情、似指「兒子尚幼」之意……而王維文中所言「兒未有識」、以裴迪爲長子、除了表示裴迪其他三個弟弟年紀尚幼、裴迪年長且尚未成名、也較能符合開元二十八年張九齡幕下這件事。」（『詩仏王維研究』五〇―五二頁）。
- (19) 具体的な年齢について、『三國志』鍾会伝、裴松之注所引『鍾会母伝』に「夫人性矜嚴、明於教訓、會雖童稚、勤見規誨。年四歲授孝經、七歲誦論語、八歲誦詩、十歲誦尚書、十一誦易、十二誦春秋左氏傳、國語、十三誦周禮、禮記、十四誦成侯易記、十五使人太學問四方奇文異訓。」とあり、また、白居易「與元九書」（那波本『白氏文集』卷二十八、作品番号一四八六）に「及五六歲、便學爲詩。九歲諧識聲韻。十五六始知有進士、苦節讀書」とあるのを

参考にして、裴迪は四歳前後ではなかったかと考えておきたい。

- (20) 宋代の版本は、『宋蜀刻本唐人集叢刊』（上海古籍出版社、一九九四年）所収の『孟浩然詩集』巻上による。修培基『孟浩然詩集箋注』（上海古籍出版社、二〇〇〇年）巻上参照。また、裴迪について、『唐尚書郎官石柱題名考』（清・趙鉞『唐尚書郎官石柱題名考』、勞格『唐御史臺精舍題名考』、中文出版社、一九七八年。合本）巻六に「新表東眷裴氏、道讓後、檢校右僕射、晉昭公識子、迥司封員外郎。石刻游芳任城縣橋亭記、稱尉河東裴迥。新書地理志、河南府河南縣有伊水石堰、天寶十載、尹裴迥置」とある。
- (21) 明刊本のうち、『四部叢刊』初編所収『孟浩然集』は「裴迪」とし、『四部備要』所収『孟浩然集』は「裴迪」とする。清刊本『孟浩然集』（『文淵閣四庫全書』所収）は「裴迪」とする。
- 現代の注釈書は、李景白『孟浩然詩集校注』（巴蜀書社、一九八八年）、徐鵬『孟浩然集校注』（人民文学出版社、一九八九年）、曹永東『孟浩然詩集箋注』（天津古籍出版社、一九八九年）、趙桂藩『孟浩然集注』（旅游教育出版社、一九九一年）などを参照した。
- なお、静嘉堂本『王右丞文集』、宋蜀刻本『王摩詰文集』（『宋蜀刻本唐人集叢刊』上海古籍出版社、一九九四年所収）は全て「裴迪」とする。
- (22) 清・趙鉞『唐尚書郎官石柱題名考』、勞格『唐御史臺精舍題名考』（中文出版社、一九七八年。合本）参照。
- (23) 傅璇琮主編『唐五代文学編年史』初盛唐卷、天寶三載・四載条。陳鉄民『王維集校注』（中華書局、一九九七年）二九〇頁参照。
- (24) 文物出版社、一九八二年影印。
- (25) 天寶三載頃、王昌齡らと交流している点は、未だ解答を得られていないため、引き続き調査を進めたい。
- (26) 王維の生年は入谷説に従い、聖暦二年（六九九）とする。入谷仙介『王維研究』二八頁参照。
- (27) 入谷仙介『王維研究』第十三章 輞川「六〇〇—六二六頁参照。
- (28) 『莊子』外篇、在宥篇の「出入六合、遊乎九州、獨往獨來、是謂獨有。獨有之人、是謂至貴。」を出典とする。
- (29) 全文は以下の通り。「檀欒映空曲、青翠漾連瀉。暗入商山路、樵人不可知。」

- (30) 全文は以下の通り。「明流紆且直、綠篠密復深。一逕通山路、行歌望舊岑。」
- (31) 入谷仙介『王維研究』第一章 幼少年時代「二二―二八頁参照。
- (32) 『文苑英華』卷三〇六では「時年二十、集作十五」とする。静嘉堂本卷六、宋蜀刻本卷十が「時年十五」とするのに従う。
- (33) 箋注本は「時年十六、一作十八」とするが、静嘉堂本卷二、宋蜀刻本卷一が「時年十八」とするのに従う。
- (34) 本稿では王維の年譜は入谷説に従ったが、一方、伊藤正文『審美詩人 王維』（集英社、一九八三年）五二―五三頁に、寧王らは開元二年（七二四）から地方刺史に派遣され、長安に戻るのには開元八年（七二〇）以後であって、諸王との交流はそれ以後と論じられている。『旧唐書』卷九十五、睿宗諸子伝、及び『資治通鑑』開元二年条、開元八年条に拠れば、伊藤説も十分首肯しうる。このことについては稿を改めて論じたい。
- (35) 『旧唐書』卷九十五、讓皇帝憲伝に拠ると、寧王憲は睿宗の第一子で、その生年は調露元年（六七九）であり、開元五年には三十九歳であった。『旧唐書』卷八、玄宗本紀に拠ると、玄宗は捶供元年（六八五）に生まれ、睿宗の第三子に当たり、岐王範は第四子、薛王業は第五子に当たる。玄宗は開元五―八年に三十三歳―三十六歳となるので、岐王範は三十歳半ば、薛王業も三十歳前半になると推測した。第六子の隋王隆悌は早くに逝去するが、長安年間初頭（七〇一）頃に存命であったことから諸王の年齢は近かったと考えられる。
- (36) 南朝梁・吳均『続齊諧記』に、「（楊）竇年九歳時、至華陰山北、見一黄雀爲鷓鴣所搏、墜於樹下、爲螻蟻所困。竇取之以歸、置巾箱中、唯食黄花、百餘日毛羽成、乃飛去。其夜有黄衣童子向竇再拜曰「我西王母使者、君仁愛救拯、實感成濟。」以白環四枚與竇、「令君子孫潔白、位登三事、當如此環矣。」」（『後漢書』卷五十四、楊震伝、李賢等注所引）を出典とする。